

本号の「扉」では、愛知医科大学の高安正和教授が、昨今の脳神経外科志望者の減少に関連して示唆に富むご意見を述べられている。決して容易とはいえない脳神経外科医への道を選んだ若者たちに、その夢を叶えさせるよう教育を施すのは指導者としての当然の責務である。そしてそのためには、まず指導者が「自分の手で顕微鏡手術ができるようになりたい」といった若者の純粋な思いに応えるだけの度量と愛情を持つこと、そして医療に対して向けられている社会の厳しい目に耐え得る安全かつ効率的な教育システムを創意工夫して構築することが必要と思われる。ずいぶん以前に術者と二人の助手、合計6本の腕が術野に出入りする故杉田虔一郎教授の手術ビデオを拝見し、その教育に対する姿勢とアイデアに感銘を受けたことを思い出す。この故杉田教授のDNAが高安教授に受け継がれていることを今回改めて知り、そこに「知識と技術の伝承」という教育の神髄をみたような気がする。目まぐるしく変わる社会情勢のなか諸事に惑わされることなく、顕微鏡を通して見る脳や脊髄の繊細さ、そしてそこに発生する病変を顕微鏡下に治療することのすばらしさをアピールすることは、3Kとも4Kともいわれる脳神経外科に新たな人材を得る大きな助けになるものと改めて感じ入った次第である。

米川泰弘教授の長編論文には、脳動脈瘤クリッピングについてご自身が受け継いだ知識と技術を、新たな形で次世代に伝承しようとする先生の強いお気持ちが表れているように思える。われわれが今立っている場所は、多くの先人によって築かれたものであり、われわれは次世代のために、その上に新たな城郭を築かなくてはならないのであろう。異国チューリッヒの地におられる米川教授だけに、今後の日本の脳神経外科を担う次世代への思いには大変に熱いものがあるように推察申し上げた。

本号の総説「視床と振戦」では、視床腹外側核群の機能について機能的脳神経外科の立場から解説がなされている。また、2つの連載では「内側側頭葉てんかんと海馬」、「中心神経回路の再生への治療戦略」といったテーマが取り上げられている。解剖をベースとした従来の外科から機能外科、さらには機能回復外科へと大きく展開していくであろう、今後の脳神経外科学が進むべき道筋がみえてくるような内容である。高安教授が述べられているように脳神経外科の基本は顕微鏡手術であり、これまでの脳神経外学の発展も顕微鏡手術の進歩とともになされたといっても過言ではないように思う。一方で機能外科や再生医療、さらには血管内治療や内視鏡手術などの急速な進歩・発展に目を転じると、ここ数年で脳神経外科学は新たな局面を迎えたと言わざるを得ない。このような状況のなかで、「知識と技術の伝承」をわれわれがどのように行っていくのか、改めて考えてみる必要があるように思われる。